

## いかに引き出すか！

熊本市立城西小学校 教諭 村上浩一

ここに一つの問いがある。「バスの運転手さんは、どこを見て運転していますか。」 2年生の子どもたちは、こう応えた。  
・バスの前の方 ・バックミラー ・サイドミラー ・歩道を歩いている人 ・お客さん ・お客さんが下りる時や乗る時の様子 ・お金をちゃんと払っているか、等々である。

又、一方で、こんな問いもある。「バスの運転手さんは、どんな仕事をしていますか」子どもたちは、こう応えるだろう。「バスの運転に決まっているよ。」と。

両方の問いとも、「バスの運転手さんの仕事」という授業の1コマである。どちらの発問が、子どもたちから考えをより「引き出した」と言えるだろうか。

「教育とは、子どもたちが持っているものを如何に引き出してやるかだ」と学んだ。

子どもたちの「引き出し」の中には、無限にいろいろな物が詰まっている。後者の発問では、残念ながら多くを引き出してやることはできない。しかし、前者の発問では、いろいろな要素が「引き出し」から引き出され、それらが皆の述べる意見によって、バスの運転という一つの「概念」として醸成されていく。

このことは、マスコミのインタビューにも応用できる。例えば、何かで優勝した選手に「今、どんな気持ちですか。」と聞いても、選手は「嬉しい」としか応えようがない。しかし、「この気持ちを誰に伝えたいですか」とか「今の心境を色に例えるなら、何色ですか。」とか聞けば、きっとそこからそれまでの練習の事や家族の支え等が聞き出していけるだろう。

我々教育者の仕事の1つは、「如何に聞くか」（発問するか）である。それによって、百八十度違った授業展開になってくる。

一方で、教育者のみならず、家庭・地域社会で大人が子どもの持っているもの、考えていることをうまく引き出してやりさえすれば現在のような青少年の犯罪は多くなかったのではないだろうか。

## 自分探しの旅！

福井県今立町の小学生が持っていて、他県の小学生が持っていないモノがある。さて、「それは一体何でしょうか」。何と、「ヨード剤」である。これは、原発事故が起きた時の事を想

定して、甲状腺を被曝から守るため配布されている薬である。この状態をどう考えればいいのだろうか。このことは、週刊誌から知った情報である。

ある地方の家屋を見ると、ほとんどの家屋で、2階が玄関、しかも2階から3階への屋根には梯子が付けられている。さて、「どんな地方の家屋でしょうか」。雪の多い新潟県の家屋である。1階が車庫か物置、梯子は除雪用で、屋根には滑り止めもついている。これは、旅行で知ったことである。

「所変われば、品変わる」とはよく言うが、本当にそのことを強く感じる。

私は小さい頃から、資料収集が好きで、小学6年頃から新聞スクラップをやっていた記憶がある。現在は、資料収集という趣味が、教材収集・情報収集となって、続いている。子どもたちがびっくりするもの、価値観を変えるもの、これらのものを授業で提示して、学習を進めているところである。

私は教材探しをしながら、いろいろな情報に触れ、自分自身がそれをどう感じ、又、子どもたちと触れ合う中で、自分は一体どんな人間なのかと、もう一人の自分を探している気がしてならない。多かれ少なかれ、人は、自分のおかれた環境の中で、「自分探しの旅」をしているのではないかと思う。

生涯学習の必要性が言われて久しい。生涯学習とは、「自分探しの旅」ではなかろうか。生涯を通して、いろいろな人生体験をし、自分の好きなこと、自分の向上的変容、自分とは何者なのか等々、と自分を探していくことだと考える。こう考えると、生涯学習とは「生涯現役」ということでもある。職場や学校という「所」が変わると、中身も当然変わってくる。これに、「時」も加わってくる。あふれる情報、移り変わりの激しい世の中で、「生涯現役」となるような、いつまでも自分探しができるような子どもたちに育てていってくれたらなと、常日頃考えている。

## 自分探しの旅！

福井県今立町の小学生が持っていて、他県の小学生が持っていないモノがある。さて、「それは一体何でしょうか」。何と、「ヨード剤」である。これは、原発事故が起きた時の事を想定して、甲状腺を被曝から守るため配布されている薬である。この状態をどう考えればいいのだろうか。このことは、週刊誌から知った情報である。

ある地方の家屋を見ると、ほとんどの家屋で、2階が玄関、しかも2階から3階への屋根には梯子が付けられている。さて

、「どんな地方の家屋でしょうか」。雪の多い新潟県の家屋である。1階が車庫か物置、梯子は除雪用で、屋根には滑り止めもついている。これは、旅行で知ったことである。

「所変われば、品変わる」とはよく言うが、本当にそのことを強く感じる。

私は小さい頃から、資料収集が好きで、小学6年頃から新聞スクラップをやっていた記憶がある。現在は、資料収集という趣味が、教材収集・情報収集となって、続いている。子どもたちがびっくりするもの、価値観を変えるもの、これらのものを授業で提示して、学習を進めているところである。

私は教材探しをしながら、いろいろな情報に触れ、自分自身がそれをどう感じ、又、子どもたちと触れ合う中で、自分は一体どんな人間なのかと、もう一人の自分を探している気がしてならない。多かれ少なかれ、人は、自分のおかれた環境の中で、「自分探しの旅」をしているのではないかと思う。

生涯学習の必要性が言われて久しい。生涯学習とは、「自分探しの旅」ではなかろうか。生涯を通して、いろいろな人生体験をし、自分の好きなこと、自分の向上的変容、自分とは何者なのか等々、と自分を探していくことだと考える。こう考えると、生涯学習とは「生涯現役」ということでもある。職場や学校という「所」が変わると、中身も当然変わってくる。これに、「時」も加わってくる。あふれる情報、移り変わりの激しい世の中で、「生涯現役」となるような、いつまでも自分探しができるような子どもたちに育てていってくれたらなーと、常日頃考えている。

## 「食」の細道

「この写真からわかることを、ノートに箇条書きにしていきなさい。」という指示から、先日行われたNIE（教育に新聞を生かす）の公開授業を始めていった。

写真は、海岸に打ち寄せられたゴミが写されたもので、本紙に掲載されたものである。木片と共にビニールやプラスチック類のゴミが目立つ。そして、授業はプラスチック前の物質、レジンペレットへと進んでいく。これらは、何と「環境ホルモン」を含んでいて、これが生物の体内に入れば「種の生存」を脅かすものになってくるというのである。

今までも環境教育において、酸性雨やオゾン層破壊の問題を扱ってきた。しかし、今回扱った「環境ホルモン」は、直接我々が「食べる」際に取り入れられるとあって、厄介な問題となっている。この環境ホルモン、

取り入れたから明日どうにかなるというわけではなく、小さい時からの「蓄積」が怖いのだ。さて、授業では後半、カップ麺の問題を取り上げていった。容器から環境ホルモンが溶け出すという新聞記事と、カップ麺業界が出した反論広告の2つを紹介して、問うた。「カップ麺は食べても大丈夫なのですか。それとも大丈夫ではないのですか。」と。食べる、食べないは、それぞれの選択になるわけだが教育現場は、できるだけ情報を提供していく場だと考えている。

最近、ファーストフードやレトルト食品等の氾濫、遺伝子組み替え食品の登場、さらには子どもたちの生活や行動と食事の関係を論じた書籍の多さが目立つようだ。考えてみれば、「食」は「生命の素」なのである。それなのに、一方では「輸入してまで食べ残す」という実態もある。

二 二年より、教育現場では「総合学習」という学習が始まる。「食」育は、一つのいいテーマになるのではと考えている。安全性・感謝・健康・生命・食文化等々、「食」育の奥は深い。松尾芭蕉ではないが、その一つ一つの細い道を地道に歩いていき、子どもたちが「自分の体は自分で守る」という自主的な態度を身につけていければと考えているところである。

### 「裏」を読む

紙やコインに「表」と「裏」があるように物事には多かれ少なかれ、この両面があると考えている。

例えば、国語科である。4年生の物語教材に「一つの花」というのがある。内容は、戦争に行く父親が「一つだけちょうだい」というのが口癖の一人娘に一輪の花を渡して、永遠の別れをしていくという話である。「一つの花」とはコスモスであり、表面的には単なる花なのである。しかし、この「一つの花」に秘められた父の愛娘に対する愛、戦争の残酷さ、平和の大切さを「裏」に秘めた作品なのである。授業ではこれを読み取らせていくことになる。

例えば、音楽鑑賞である。ベートーベンの『運命』、あの「タタタターン」という旋律、この「裏」に隠されたもの、例えば耳の不自由さに打ち勝って、生きる人間の喜び等が表現されていることを読み取らせることになる。教育面ばかりでなく、日常生活にも応用できる考え方である。一昔前に流行した「機能性飲料」、これなど現代人がいかにバランスを欠いた食事をしているのか、忙しい日々を送っているのかの裏返しだった。

それはさておき、授業ではこのように、1枚の写真に隠されているもの、1つの題の裏に隠されているもの、1つの道具に隠されているもの、つまり作者や製作者の真意、物事の真相や道理等を探っていくということになる。問題は、その「探らせ方」なのである。私は、この「探り方」「学び方」を学ぶと同時に、子どもたちにも学ばせていきたいと常日頃考えている。

しかし、私の一番の課題は授業もそうだが、子どもの言動から、その真相を図り知ることである。日常生活に追われて、子どもの「表面」である言動だけに対応しがちである。なぜ、そんな行動をとったのか、そんなことを言ったのか、「裏」を読まずに子どもに接している自分がある。今、一番私に必要なものは、こ

の人間洞察のような気がする。教師とは、難しい仕事であると同時にやりがいのある仕事でもある。

### **i f の発想**

もし教師がプロ野球監督の視点を持って教育すれば、・・・今年優勝した横浜の権藤監督は、必要最低限の指示しか与えず、後は選手の自主性に任せているという。最近、私は体育科の導入で「4週、走ろう」という指示から「3分、走ろう」という指示に変えた。一人一人、自分のペースに合わせたスピードで自主的に走らせようと考えてのことである。それぞれに体力が違うので、当然と言えば当然のことなのだが、確かに、子どもたちの意欲も結果もこちらの方が断然良かった。

一方、阪神の野村監督はID野球と言ってデータを重視して、理詰めの野球をされる。教師も一人一人の子どもをしっかり見つめ、意味ある指名や指導を適切にし、授業の腕を上げていきたいものである。

もし教師が企業経営者の視点を持って教育すれば、・・・企業は利潤を生む経営をしていかねばならないので、教育とは馴染まない部分が多いが、見習うべき点はある。例えば、デパートの「シャワー効果」（最上階での催し物開催やレストラン設置）や「噴水効果」（地下の食料品売り場の設置）と言われる、消費者の購買意欲を高める方法論である。学校行事やPTA行事等での企画に応用できないだろうか。さらに校舎内の環境設営にも応用できそうである。

もし教師が番組制作者の視点を持って教育すれば、・・・例えば、数十秒内でその商品の宣伝をしているコマーシャルの構成力等には、目を見張るものがある。子どもたちは、このコマーシャルを意外としっかり覚えている。面積の単位換算もこんな風に覚えさせられたらとつい考えてしまう。これは授業構成力とも関係がありそうだ。この手法を使う使わないは別として、そのノウハウを考えることはとても有意義なことだと考える。

このように、「もし」というi f 発想で、多角的視点から教育を考えていくと、さらに教育の幅が広がるような気がする。私は何より子どもたちが学校でワクワク、ドキドキするような授業、教育がしていければと考えている。もちろん、その前に私自身がいつまでもワクワク、ドキドキするような感性を持ち続けることが必要だが。

### **循環の必要性**

中学生の頃、食物連鎖というピラミッド型の図を習ったのは、私だけではあるまい。でも、よく考えてみると、あの図は不十分である。なぜなら、自然界は循環しているからである。高等動物の糞や体を微生物は食料にしているからである。しかし、これが循環しなくなると、どうなるか。それは、公害の発生を導くし、環境問題を発生させる。

このことは、自然界に限ったことではない例えば、物を生産し、その製品をお金で買う企業は儲けたお金で給料を払ったり、設備の拡大を図る。その給料でさらに、別の品やサービスを購入し、それらの需要が高まる。つまり、経済も循環している。「金は天下の回り物」とはよく言ったものである。経済が適正に循環しなくなると、倒産・失業等という問題が起きてくる。

企画する際に、計画 実行 反省 計画というような流れで実施すると、うまく回りだす。しかし、一方的ではうまく進まないだろう。

この地球でさえ、太陽の周りを回っているからこそ、風も吹けば、雨も降る。物事を善し悪しを判断する際に、この「循環」というキーワードが一つ上げられそうだ。

ひるがえって、教育界はどうなのだろうか自分の授業を振り返ってみる。教師の説明ばかりの一方通行になってはいないか。教師の 価値観を押しつけてはいないか。子供たちは自分のことを表現しているだろうか。

親子の関係も同じであろう。聖徳太子は、十七条の憲法で「和をもって貴しとなす」と 言った。まさしく、この通りである。「和」とは、循環であるし、「円満」ということでもあるだろう。